学校現場から悲鳴が聞こえる

第２４回「今、進学校で起こっていること」

高等学校に対しては一般的な言い方として進学校とか教育困難校、あるいは中堅校といった表現がされています。特に通学区が全県一区になってからは、都市部の男子校、女子校に難関大学を目指す生徒が集中し、学校間格差が一段と進みましたが、進学校では学業半ばで進路変更をしていく生徒が多いといいます。

記者　昨今の高校生はおとなしくなったと言われていますが、２０～３０年前のいわゆる教育困難校では喫煙や飲酒、窃盗といった問題行動が頻繁に起こり、進学校がうらやましく見えたものです。

Eさん　正直なところいわゆる教育困難校に比べ、保護者の経済力や生徒個人の学力や非行の発生件数などでは恵まれていると思いますが、やはり多くの問題をはらんでいます。

記者　進学校での問題というとどんなことがあげられますか。

E さん　最大の問題は入学後の進路変更でしょうか。せっかく自分が希望したであろう高校に入学しても、いろいろな理由で退学などの進路変更をしていく生徒が少なくないという事実です。

記者　具体的にはどんな状況ですか。

E さん　今春の卒業生は３００人余りでしたが、３年前に入学した時に比べると１０数人減っています。つまりその数の生徒が退学等になっているわけです。

記者　１０数人というと１クラス２～３人退学していることになりますが、結構な数ですね。

Eさん　生徒の多くはだんだん登校できなくなり、欠席日数が規定を超過し、留年するか休学するかあるいは定時制や通信制を含む他の高校へ転校を迫られるという経過をたどります。その間、担任や学年の先生と生徒指導部教育相談係の先生が連絡を取り合い、カウンセリングをしたり家庭訪問をしたり専門医を紹介したりといった対応をします。その結果復帰でき、卒業していく生徒も一定数いますが、状況が改善せずに進路変更していく生徒が大半です。担任や関係の教師は大きなエネルギーを費やします。

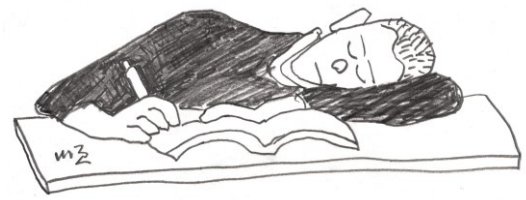
記者　欠席日数が年間の出席日数の３分の１を超えると進級が不可になるという学校の規定がありますが、どうしてそんなに欠席が増えていくのでしょうか。

Eさん　なぜこのような生徒が毎年一定数現れるのか、はっきりとは断定できませんが、２～３私見を述べたいと思います。

一つには学校の雰囲気というか態勢の問題です。生徒は合格発表後の春休みから膨大な量の課題が渡され、早々に日々勉強漬けの生活となります。そのうえ部活動、しかも体育系の部活動への参加が奨励されているので学習と部活動で卒業までゆっくり休む暇はありません。さらに学校からは東京大学や東北大学を目指せといった圧力がじんわりと与え続けられています。こうした雰囲気に自分が描いてきた高校生活とのギャップを感じる生徒も多いと思います。

二つ目は、一つ目とも関連しますが、教

科担当者から出される課題の多さです。対応能力の高い生徒、学力の高い生徒はそれらをきちんとこなし、実際にそれ相応の大学に現役合格していきますが、中学時代に頑張って頑張って何とか合格した生徒たちにとっては大きな負担です。



記者　教師たちは教科間での課題の量などの協議はしないのですか。

E さん　教師集団も多忙化し、個々の生徒の学力の差を考慮したり、各教科間の課題量を調節したりする時間が無く、いきおい各教科で膨大な課題を日々、週末、長期休業中と出すことになります。さらに最近は人事評価の賃金リンクも本格実施となり、一層こうした傾向が強まるのではないかと危惧しています。

記者　教師間の競争ですね。何かしていないと評価されないのではないかという強迫観念によって問題づくりやデータの集計分析など自ら多忙の身にしている姿を私が現役の頃もよく見てきました。生徒にとってよかれと思ってしていることなのでしょうが、生徒も自分も追い込むことになりますね。

E さん　膨大な課題を前にして、できない問題は答えを写して済ませてしまうという生徒も多いと思いますが、中には完璧主義というかこだわりが強い生徒もいます。私がかつて担任した生徒で、徹夜に近い取り組みをしても課題が終わらず、学校には家族を装い体調不良で遅刻すると電話連絡して、市役所のロビーなどで課題を仕上げてから登校したということがありました。まさに本末転倒ですが、課題の多さは私たち教師集団の問題でもあります。

三つ目ですが、今の例でもその傾向が窺えますが、発達障害的な要素を持った生徒が増えているのではないかということです。学校にうまく馴染めない、器用にというか適当に手を抜いて課題を済ませることができない、こういう生徒が増えている。これは本校だけでなく、県内外でそう感じている教師は増えているのではないでしょうか。単に発達障害の問題が広く認知されてきたので増えたように感じるのだという意見もありますが、今後は様々な角度から検証されていくのではないかと思います。

記者　本誌の NO 20（注１）では進学校に勤める養護教諭が、NO32（注２）では別の進学校に勤める教師の声を取り上げています。前者からはアスペルガー症候群、LD（学習障害）ADHD（注意欠陥・多動性障害）を持った生徒がたくさん保健室に来ると言っていました。また後者からは、「学校にうまく適応できない生徒の対応では、物差しの当て方を変え、その子にあった指導をしっかりと時間をかけてみんなで探していくようなシステムができればいいのですが、（中略）時間的精神的余裕はほぼ無いと言っていいでしょう」と語っていました。今回の話にも通じるものです。

県教委の統計では退学者数は全日制では減少傾向にあるようですが、今回の進学校の問題は深刻です。膨大な課題に追い詰められていく生徒、その課題づくりに追われる教師たち、生徒の変容の可能性の検討も含め、教育のあるべき姿が問われています。

（注１）2014 年 4 月発行「育ちと学び」NO 20 に掲載のシリーズ第 7 回「養護教諭の複数配置は切実な課題」

（注２）2017 年 4 月発行「育ちと学び」NO32 に掲載のシリーズ第 19 回「文武両道の進学校と言うけれど」